
飛べないカラス

相武美佳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

飛べないカラス

【Nコード】

N9172M

【作者名】

相武美佳

【あらすじ】

摂食障害、鬱病、自傷癖を持った奈津美は実感を出て一人暮らしを始めた。奇想天外、健全な人には決して理解されないであろう奈津美の生活。最後に奈津美はどうやって生きていくのか。

もう七月だというのに私の部屋は暑さを感じない。カーテンがゆらゆら揺れている。風が通る…時間は確実に刻まれている…

「人質に捕われた女性を無事保護いたしました。一部始終をご覧下さい」

電気がわりのテレビが喋っている。この家には私ひとり。私は何も喋らないから、かわりにテレビが、勝手にテレビが喋ってくれる。あと四日で私は二十歳になる。

五月。私は大学を辞め、家を出て、フリーターになった。引越したアパートは親持ちのだ。だから家賃だけは浮いた。しかし私は過食症。いくら働いても足りるはずがない。しかも七年通っている精神科からは鬱病の申告もされていた。

アルコールで満たされ、眠剤を飲んで…現実から少し離脱した瞬間何かが弾けた。私の中の何かが確実に弾けた。

プス…たらーん…

気がつくと私は包丁を太股に刺していた。当たり前のように血が流れる。細く短い川だ。もう一回。二本の川が私の脚に流れた。

プス…ぐさ…ぐく…

手に力が勝手に入って、包丁は奥深く侵入してきた。勢いよく抜き、タオルで押さえた。息が切れそうになった。倒れ込み、冷たい床に頬が当たると、今度は瞳から川が流れた。私の中のダムが崩れた…手首や脚をカッターで切ったこともあるし、薬の大量摂取で救命に運ばれたこともしばしば…

拒食の時は内科に入院。次は精神科に入院。病院には慣れっこだ。だが包丁は初めてだった。初めて見る川は以外に綺麗だった。澄み

切った透明な水が流れる音…それにもまして私の川は綺麗だ。翌日、病院に行って縫われた。切っては貼つての繰り返し。

「前にもやったの？」

「あーカッターですけど」

「手首見せて」

「やってるね」

そして医者私の腕を撫でた。

「何があつたの？」

顔を見ると以外と若く、イケメンだった。

「別に特に…」

早く縫えよ。いろいろ聞くなよ。怒りはマックスだ。

私には男がいるが彼氏や恋人という類ではない。彼は名古屋で生まれ育ち、友達の飲み会で知り合った。だから遠距離だ。性交をするときだけ私は名古屋まで行く。私に愛などない。

「きてよあ」

「あー無理かも…」なんて会話もしょっちゅうだ。

「奈津美の身体が欲しい!!」

正直すぎやしないか…しらねえよ…くだらねえ自分で処理してくれ…ってかうざい…

階段もろくに登れない脚が私を五反田へ向かわせた。行く目的もない。金もないから、ただの暇つぶし。

バイトも辞め、…ドラッグストアだが二階建てで、休みがちな私は当然クビ…と言うか自ら辞めた。こんな私でも赤の他人に迷惑をかけるのが一番嫌いなのだ。

ふらふら歩いているとキャバクラのキャッチにあう。

「キャバクラとか興味ない？」

話しかけるな。無視して通り過ぎた。

「あの、夜のお仕事興味ないですか？」…まただ…うざい。過ぎ去

ろうとしてもついてくる。

「あの。名刺だけでも…」なんだこいつ…

要らないですってニコッと笑って私は改札に入った。名刺くらい貰ってやればいいのだが…

私の目に映るもの全てが二次元ってこと。他人と話すのが面倒臭いってこと。私に関わらないでってこと。言葉を発するのが疲れるってこと。次つぎとキャバクラのキャッチにあう。思いおこせば、学生の頃にアパレルのバイト帰り、先輩たちと別れてから改札に向かうまでの30秒間でもキャッチは付き物だった。私は見た目はチャラくないし、ギャルでもない。うざいにも程が過ぎて、無表情で一点を見つめ歩いてた。そこは溝の口。

今、私がいる五反田なら尚更か。金のためなら出来たかもしれないが、今の私に働く意欲はない。

家路に着くと、まずタバコを吸う。時間を空けたタバコはうまい。そして冷やしておいたビールをあおる。次に過食嘔吐。

これが私のライフスタイル。

彼氏…ではないが一応…はいるが遠距離で、それでも私は新幹線に乗り彼に会いに行っていた。だが、今はそれさえも面倒臭い。自分を愛せない奴は他人を愛せない。これは正しい。

他人を思いやる気持ちはあるが、愛することは出来ない。優しくすることも出来るが、愛せない。好きと愛するってものは、まるで違う。だから私は前に付き合っていた人とも会う。今の彼にも会う。私はどちらも愛してないし、どちらも好きだし、どちらも私を好いてくれるから…

私は独りに人一倍臆病だ。

気づけば私は平穩無事に誕生日を迎えていて、零時ジャストにメー

ルが何通か届いていた。世間という節目を迎えたわけであるが、こんなにもわくわく、そわそわ、うきうき…しなかった誕生日はない。私にとってはなんら変わらない…というより変わらせないようにしていたのだろう…ライフスタイル。

コンビ二に金をおろそうと自転車をこいでいると、車道を走っていた私におじさんが

「反対通行は罰金五万だからね」と苛立って自転車をこぎながら私に向かってきて、止まり、ご丁寧に手をパーにして言い放った。いきなり止まるなよあぶねだろうが…つか聞こえてるし、五万が五つという数字くらいわかんだよ。歩道に人がいたから避けて車道に出ただけだよ。そこにたまたまお前が来たんだろうがクソ。私はいつも通り心で呟き無視してペダルに足をかけた。

「…うつせえ…クソジジイ！」自分でも驚く声量だった。私は常に苛々しているんだ…ああ、そう、私はいつもクソクソクソクソ言っている。そこにアクションが加わると止まらなくなる。だから外出しているときは誰とも目を合わせないように心がけている。目が合ってしまうと、いつも何見てんだテメエ…気持ち悪いんだよクソ…となるわけで、舌打ちをしてしまうわけで、物凄い勢いで睨んでしまうわけで、自分に歯止めがからなくなりそうで、いつか赤の他人様をあやめてしまいそうで怯えている。私が最も卑下する無差別殺人なんてものに成り兼ねない。二十歳の誕生日は最低で最高だった。ひとりで、ずっとひとりで過ごした。大学の友達には嘘をついて

「今高校の友達というー」

って言って、家族には

「美佳が祝ってくれてるー」

って言って、前の彼氏には

「大学の友達と呑んでるー」

って言って…

私はひとりでビールを飲んで、何も考えないように冷蔵庫にあった野菜を全て千切りにした。母親が料理の先生だったため、包丁裁きはいっちょ前。

人が嘘をつくには理由がある。

「あんたは本当に、いつから嘘つきになったのかしら」
いつか母親に言われた。言える理由なら人は嘘などつかない。

ビールを飲みながら、食器やまな板等など片付けていたら、笑いが漏れた。

「あー、もー二十歳だよー、うけるー」

ほぼ奇声に近い。酒もタバコも許される。自由。じゆう…世間で認可されてしまったものは私にはなんの優越感も与えないことに気がつく。

「マミ、ビール買ってくる」

「行つてらあ」

「マミはいる？」

「要らない」

「マミは飲まず食わずだもんね、了解」

「ビールだけじゃないでしょ。どうせ過食するもの大量買い」

マミはそう言つて笑った。

「ただいま」

「おかえりい」そしてマミの言った通り私はビール以外に食料を買つて帰っていた。マミは笑ってくれた。

「乾杯」マミはそんな私を微笑んで見ている。そして吐いた私を、ほらねと言わんばかりに見ていた。

「最悪…体重増えてるよ、マミー！」

「どうせ完吐き出来なかったんでしょ？」

マミは全てお見通しだ。いつからか私の家に居候している。マミは

何も食べないし、何も飲まない。私の産物。マミはたまにいなくなる。私が必要な時だけ気付くと傍にいる。マミは最高の奴だ。

「また甘いもの買いに行きたいんでしょ？」

「分かる？」

「今日駅前のコンビニには行っていないじゃん？」

ナイスだマミ！朝にシャワーを浴び、人通りの少ない道を選び自転車スーパ―へ走らせる。ドーナツ、ドーナツ…ビール、ビール…

あとなんだっけ？

「とりあえず食べたいもの買えばいいじゃん。お好み焼きソースは忘れずに」

マミは言う。

「ってかいつも私そうだもんね。分かってるねー」

いつの間にか外出時にもマミは突然現れ、私に助言してくれるようになっていた。

バイトもしてないのに私の食欲は無限大。もう、どうだって良くない。金が無くなれば、きっとバイト始めるだろう…それが無理ならば… ああ、考えるのは止めよう。

久しぶりに空を見上げた。雲と雲の切れ間に見える青。今にも飛んでいけそうだ…何でも出来ると思ってしまう。翼がなくても飛べる。あの切れ間に吸い込まれる…吸い込まれていく…吸い込まれる…いつそのこと吸い込んでくれ…そして私も仲間に入れて…

ふっ…っと思を吐き出すと現実を引き戻される…

無理だよ、翼ないじゃん私。失笑…

そして、いつの間にか青く見えてた空も青には見えなくなった。三度の飯は全て過剰で嘔吐。思考回路が狂うのは当然だ。外出時にはナミが付いてくるようになった。

「ヤバイ、坂しんどいんだけどナミー」

食欲もないのに買い出しに行く私。きつと何も食べてないからだ！
と思っではみるものの、嘔吐後の脱力感といったら、この上ない。
「まあね、昨日夜中…ってか徹夜でプレス作ってたじゃん。そのせ
いじゃん？」

私は夢中になると全てを無視して夢中になる。なにもかも見えなく
なってしまう。

「いや、でも私ちゃんと朝薬飲んでたよね？」

「…飲んでた確か…」

ナミ確か…は止めてよ。確実を望んでいるんだよ。いや、家にいる
のはマミだから仕方がない。ナミを責める権利は私にない。

そして、あんドーナツやら揚げ物やら高カロリー高コレステロール
な食料を買い占め家路に着く。見るだけで吐き気がする。だが食べ
はじめると、巨漢もビックリ完食だ。自分でも分からない。一日に
三回買い出し。なんのため？か。どうして？か。「私は誰？ここは
どこ？」みたいなもんだ。呆れてしまう。「ビールだビール！」
誰かが叫んだ。

「何も考えなきゃいい」

お前は一体誰だ？まあそのうち出てくるだろう。

アルコールが身体を流れ胃を焼いていく。そんな私をマミもナミも
否定しない。そう…私には私を否定しない存在が必要なのだ。人は
みな、少なからず否定する。強く真っ向から否定する奴もいれば、
柔らかく、身体を大事にしなよと言う奴もいる。それは全て私への
優しさで、否定だ。優しさは怖い。

最近の私はザ・引きこもり状態だ。手足をだらーんと、何の力も重
力も感じないまま眠っていた。

ガチャ…ドアの開く音。チェーンが引つ掛かる音。合い鍵は常に父
が持ち歩いている。「奈津美いたのか」

…ああ、お父さんか。てか、電話もせずに来るなんて…せめてメー
ルだけでも…

「あー、ちよと待つてて」

満足に動けない。金縛りのようだ。ドン… 何かを父は置いた。この前、扇風機持つてくからと言っていたことを思い出す。金縛りがとけ、玄関に向かう。

あれ？誰もいないんですけど…

「ジン！お前のせいだ」

私は呆れる。

「へへっ」

ジンは笑う。へへっじゃねえよ…無理して起きたこの動力をどうしてくれるんだよ。ジンは悪戯好きだ。そして私と同じ位、口が悪い。いつの間にか、マミ、ミナ、ジンとの、共同生活が始まった。

酒に溺れ、苛立ち、ハサミで机をゴツゴツ叩いた。下か隣かわからないけれど、うるせえと言わんばかりにドンと何かをぶつけられた。私はもう一回強く、さらに強く机を刺した。ゴツゴツゴツ…

反応はない。

「やり返せよコラ！！」

ゴツ…

反応はない。窓は空いていたから聞こえているだろう。

「このクソつたれが！！臆病者が！！」

私は叫んでいた。

キツチンに座り込み、全身を殴りつけた。死んじまえ、死んじまえ、お前なんか死んじまえ。きっと明日は痣だらけだ。こんなに取り乱しているのに理性は働く。

酔いを冷まそうとベランダへ行き、タバコを吸う。

「ジン…私ここで寝れる」

「ちゃんとベッドでねなよ」

ナミが言う。ナミはいつも正しい。正しく私を導く。だから私はそれに従う。一口サイズの中に眠剤を入れ、一気に飲み込んだ。気持ち悪い。

何故人とは同じ類の人という人種と一緒に共存出来るのだろう。隣の部屋も、下の部屋も、男女二人共同生活をしているようだ。今まで私も家族と一緒に生活していたわけだけど、その事実され信じられない。今の私は、他人…ともかく人…と一緒に生活することは考えられない。

「喉ひつかいた。血出てるし」

吐きながら言った。「大丈夫？」

ナミが心配している。ありがとうナミ…

しばらくベッドに倒れ伏せ、頭痛と闘ったすえ、トイレの掃除をする事になった。ゴシゴシゴシ… ボトン…

マジ…？携帯が便器の中へダイブした。オウオウオウオウ！お前そんなに暑かったのか、お前自分で動くほど暑かったのか、お前にそんな力があつたなんてびっくりこいたぜ。いや待て。上がつては来れないのか？ 取りたくない…いや…取らねば…でも…でもでも…

「ブラシで止めて引き上げて。早く！！」

ああ、ハイ！！そうだナミ、ナイスだナミ。引き上げた携帯を水で流した。見事にシャットダウンし、まるで怒っているかのように、その怒りを表現しているかのようにブーブー鳴り狂っている。うるさいなあ…無理矢理電池パックを外し息の根を止めた。

「ジン！！ふざけんなお前悪戯にも程があるだろ、殺すぞオイ！！」
黙るジン。哀しそうなジン。

「悪かったよ、ごめんジン。言い過ぎたよ、ごめん殺さないよ」

ジンはこくと頷く。私にはジンが必要なのだ。居なくなったら困るし、まして携帯が使えない今、私はさっきの携帯のように発狂しそうだ。その日は一日中ナミが相手をしてくれた。

「喉ひつかいたのに酒と煙草ってどうなのよ？」

「吐かないから」

「まあね、今日は吐かないように」

翌日気晴らしにふらふらと五反田へ行った。そしてマミセレクトで洋服を買った。マミは洋服のセンスがいい。暑さで倒れそうになりながら家路に着いた。

「温暖化…おんだんか…オランダか！ オランダか！ オランダか？」

「くだらねえ」

マミが笑った。世界各地で起きている現状。人間もそう長くは生きていけなくなるんだらう。そして新に新種の生物が生まれる。マミやミナやジンも新種の生物なのかもしれない。私は冷蔵庫に入っていた野菜を全て千切りにした。粉々になった野菜たちは炒められ、跡形もなくなった。食べる予定もないのに私は料理をする。理由がある行為は、私には無意味だ。無意味な行為が私には必要なのだ。

久しぶりに会った母「ちょっと痩せたんじゃない？」なんて聞かれただけで上手く無視した。母が私の外見に酷く敏感になるのは仕方がない。拒食症になって、まるで骸骨のような娘…泣き顔が猿みみたいな気持ち悪い娘…ゴツゴツのペラペラな娘…鼻にチューブを着けて歩いてくる娘…

その日は母と一緒に買い物をした。海鮮丼、卵、素麺、ビスケット、コンフレーク…あと、忘れてはいけないお酒。とりあえず大量買いた。いや、大量買いしてくれた。帰りはアパートまで車で送ってくれて別れた。部屋に入ってビールを一気飲みした。

私にとって興奮とは何だろう？百歩譲って発狂？細胞は増殖し、分化し、幹細胞になり、また増殖し、分化し、特定の機能を持った細胞へと成長し、やがて細胞死。そう、この世に存在するものには「死」が必ず付き物なのだ。

アクローミス（破死）、アポトーミス（自死）細胞には二つの死がある。アクローミスは不慮の死。アポトーミスは予定された死で合理的な死。

私は学生の頃、生物の授業が一番好きだった。DNA回路を初めて見た時はアドレナリン大放出。一番仲の良かった、あーちゃんと先生の話も無視して、一番前の席でキャツキャツ言いながらはしゃいでいた。席が隣だったからずっと喋っていた。だから私もあーちゃんも生物の成績は断トツ。でも、いつもあーちゃんが一番で私は二番。卒業するまで順位は変わらなかった。こんな私に今でも一緒にいてくれるあーちゃんは宝物だ。今は、あーちゃんは臨床工学師を目指して大学に通っている。二人して推薦で大学へ行った。あーちゃんは工学師、私は臨床検査技師。二人で同じ病院で働きたいねって…

でも私はほぼニート。生物学や生理学の資料や教科書を見ていると落ち着く。大学で使っていたものは受験用ではなく、より詳しく説明されていて、アドレナリン放出。一年の生物学系の授業は、「知ってるし…」つか教科書に書いてあること言ってるだけじゃねーよ」なんてぶつぶつほざいていた。そんな私を、奈津美は頭良いからなあなんて机に俯している友達たち。だったらこの授業の、このジジイの説明聞けよ！！と思いつながら一緒に机に突っ伏していた。ニートが生物学の資料を読んでいる今の私には、彼女たちを見下すこととはもう出来ない。むしろ見上げる立場だ。

翌日、祈りは叶わず携帯を直しに行った。

「早くても明後日ですね」

その言葉に愕然としながら家路に着くと、むしゃくしゃした気分を晴らす為にコンビ二へ走り、カラー剤を買い髪を染めた。

「ねえ私と同じ色にしなよお」

「マミは金髪似合うけど…」

「じゃあ一個下のこの色ね」

ずっとほっとかれた髪はほぼ黒くなっていたが、マミセレクトでは金になった。だが、流石マミだ。以外といける。

「でも良かったじゃん。今のより、新しい機種にしてもらえて。流石奈津美！」

イエイ！二人でピースして、互いの指にピースの片方の指を挟む。チヨキチヨキ。赤の他人に愛想よくして特をすることは、私が生きてきた上で身につけた唯一の特技。

「でも、それが続かないのが欠点なんだけどね」

ナミが言った。確かに… ナミは冷静沈着で、いろいろなことを、いろいろな方向で見つめ答を導く。その晩は呑むだけ呑んだ。酔うと意味不明な暴言を吐きまくる。

「死んじまえ死んじまえ死んじやえ倶楽部入部決定！ファックファックファックくそばあ！うるせんだよクソ」

呑むものが無くなって、煙草を吸いにベランダへ出た。ふいにカラスがベランダのフェンスに止まった。ジンも出てきた。

「ねえ、カラスだよ」

ジンは何も言わなかった。ジンは徐にカラスの脚を掴んだ。何をするんだ？何をするんだジンよ。よく触れるな… なんて思っている。ジンはカラスの脚に掴まりながら微笑んだ。あんなに柔らかいジンの笑顔を見たのは初めてだった。

「ジン？」

その瞬間、カラスと共に、空に飛んで行った。

「ジン？ねえ、どこいくの？」もうこの声は届かない。部屋に戻り

「ジンがカラスにさらわれた…」ぽつんと響いた私の声。マミもナミも「そう…」としか言わなかった。翌日の夜、ナミはジンと全く同じかたちでカラスと飛んでいった。きっとマミも飛ぶのだろう。

月明かりに燈されて、漆黒と共に飛ぶのだろう。

「マミ行かないで」

マミは優しく笑う。嫌だ嫌だ…

連れていけよ…

フェンスを乗り越えてマミに掴まろうとした瞬間、ドスっ…

「バーカ奈津美!!」

私はフェンスの内側で倒れた。

「あんた人間でしょ。飛べないわよ。大好きだよ、奈津美…」
またこの部屋にひとり。無駄に広い空間に私がいる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9172m/>

飛べないカラス

2010年11月22日11時05分発行